



ヒューマニティーズセンター
Humanities Center

「世界三大美人」言説の生成 ——オリエントな 美女たちへの願望

永井 久美子

「世界三大美人」言説の生成 ——オリエンタルな美女たちへの願望

はじめに	2
1 クレオパトラの登場と美人論の展開	5
2 西洋のオリエンタルな美女としてのクレオパトラ	13
3 「日本を代表する美女」となる歌人小町	22
おわりに	33
関連事項略年表	34
日本近代における美人論に登場する主な女性たち	36
著者紹介	40
編集後記	41

「世界三大美人」言説の生成 ——オリエンタルな美女たちへの願望

【概要】

クレオパトラ、楊貴妃、小野小町を「世界三大美人」と称するのは日本独自の言説とされる。近代以後の産物と推測されつつも、追究されることのなかったその起源を追った。ローマを混乱させたクレオパトラと唐を衰退させた楊貴妃は、破滅を導く「運命の女」として19世紀末に評価され、小野小町も、日清・日露戦争に勝利し、中華世界や西洋世界を傾けた日本を象徴する美女として捉えられた。日本を代表する美女として特に小野小町が選ばれた理由として、「国風文化」を担う歌人の一人であったこと、「小町」が美女を広く表す名称であったことが挙げられる。「世界三大美人」言説は、明治末期から大正初期の頃、「小町」が「ミス」以上に美女を表す呼称として定着していた時期に、美人論が多く展開された新聞や雑誌を通して生み出されてきたものと考えられる。

【キー・ワード】

世界三大美人、クレオパトラ、楊貴妃、小野小町、美人論、明治・大正期、新聞・雑誌、日清戦争・日露戦争

【謝辞】

本研究は、LIXIL Ushioda East Asian Humanities Initiative 個人研究「平安女流文学者たちの近代——「良妻賢母」と「美人」と文学」およびJSPS科研費17K02656 基盤研究(C)「前近代文学者たちの近代——明治・大正・昭和期における伝記と肖像の継承と変容」(研究代表者: 永井久美子)の助成を受けたものです。

はじめに

「世界三大美人」ないしは「世界三大美女」なることばは、近年もTVCM等で取り上げられることがあり、21世紀の日本においても広く知られている。メディアが「世界三大美人」言説を現代において流布させてもいるだろう。三人の人選はクレオパトラ、楊貴妃、小野小町である場合と、小野小町ではなくヘレネである場合とがあり、現代の日本では、どちらが圧倒的に多いということもなく、二つのパターンが混在している。

小野小町を挙げるか否かに揺らぎが認められるように、「世界三大美人」の人選と選定方法に疑問をもつ人は少なくないようだ。2018年10月、東京大学ヒューマニティーズセンター（HMC）のオープンセミナーにて「近代「美人」言説における小野小町」と題する発表を行った後、複数のインタビューを受ける機会があったのは、小町を「世界三大美人」に数えるのは日本だけらしいという問題への注目度の高さを反映したものと考えられる¹。

1 HMC 第2回オープンセミナー「近代「美人」言説における小野小町」2018年10月12日、於・東京大学東洋文化研究所第一会議室、報告者・永井久美子、ディスカッサント・林香里（<https://hmc.u-tokyo.ac.jp/ja/open-seminar/2018/onono-komachi-ruikou-kuroiwa/>）。その後、内容をより拡張し、英語での発表を行った（NAGAI Kumiko “The World Beauties and Classical Japanese Waka Poetry” International Comparative Literature Association (ICLA) Congress Macau 2019, University of Macau, July 30th, 2019）。研究内容が2019年3月7日に東京大学ホームページUTokyo FOCUS FEATURES（https://www.u-tokyo.ac.jp/focus/ja/features/z0508_00096.html）に掲載されたことを契機に、テレメール進学カタログ『SELF BRAND 2020』（株式会社 FROMPAGE）、東大発オンラインメディア UmeeT、「新説! 所 JAPAN」（関西テレビ）からのインタビューが続いた。

「世界三大美人」なる話は、近代以後に始まったものであろうとの推測はなされてきた。著書に『美人論』(リプロポート、1991年(のちに朝日文芸文庫、1996年))のあることで知られる井上章一氏は、2008年に別の本で次のように述べている。

クレオパトラと楊貴妃に小野小町をならべて、世界三大美人という。しかし、こんな評判が定着しているのは、日本だけだろう。(中略)もともとは日本でも、本朝三美人、つまり日本史上の美女だけをとりざたしてきた。それが明治以後に国際化の時代をむかえ、世界三大美人へとあらためられたのだろう。そして、小野小町以外のポストは、海外の美人にゆずったのだと思う²。

また、yaplog!のサービス提供終了により現在は引用元の確認ができないが、次のように記したブログがあったという。

明治時代に出来た表現だと思います。おそらく、当時の講談師や文士兼新聞記者みたいな人が作った表現でしょうね³

2 井上章一『日本の女が好きである』PHP 研究所、2008年、pp. 114-115。

3 まとめサイト「世界三大美女に小野小町を入れているのは日本だけだった！」による引用 (<https://matome.naver.jp/odai/2142629639010868401> : 2020年6月28日最終閲覧。「NAVER まとめ」サイトも、2020年9月30日をもってサービスを終了している。)。出典とされるブログ「世界の3大美女」小野小町がどうして選ばれた? (No.21) :: 侍純太郎の独り言」は、2020年1月31日の yaplog! サービス終了により閲覧不可、記事掲載日時不明。サイトは HMC セミナー後に発見したものである。

このような推測が行われつつも、クレオパトラ、楊貴妃にヘレネないしは小野小町という取り合わせの起源の詳細が確認されたことはなかった。そのような状況をふまえ、HMCセミナーでは、明治期以降の新聞・雑誌等をたどり、「世界三大美人」なるものに小町を数える話がどのように確立し広まったかを検証した。セミナーでの発表とその後の調査の内容をここにまとめるものとする。



第2回 HMC オープンセミナーの様子

1

クレオパトラの登場と 美人論の展開

「世界三大美人」の言説が明治以降の産物であるとみなされるのは、三人のうちの一人がクレオパトラであることによるだろう。日本でクレオパトラの名が広く知られるようになるのは、プルタークの『英雄伝』とシェイクスピアの『アントニーとクレオパトラ』が紹介された影響が大きかったとされる⁴。ただし、坪内逍遙訳の『アントニーとクレオパトラ』(大正4年(1915))や高橋五郎訳『プルターク英雄伝』(全4巻、大正3-4年(1914-1915))が出版される前から、クレオパトラの名は新聞や雑誌に散見される。外国語を読むことのできた知識層は、日本語訳を介さずにプルタークやシェイクスピアのテキストからすでに知識を得ていた。

クレオパトラの名が新聞に現れた管見の限りもっとも早い例として、『読売新聞』明治21年(1888)7月20日朝刊の社説「流行論その4 美醜判断の困難」を挙げることができる。

4 遠藤直子「クレオパトラの表象——その死のパブリック・イメージ」『東北大学附属図書館調査研究室年報』第6号、2019年3月。

人情なるものハ戀^ほれた女ハ痘痕^{とうこん}も笑窩^{えくぼ}と見ゆると云ふ程其の感覚と自信するものなれば其れも強^{あなが}ち無理にハあらざるなり故に嬋妍^{せんけん}たるクレオパトラ婀娜^{あだ}たるウエナスと以て之を阿弗利加^{あふりか}人に示したらんにハ彼等ハ果して美人と思ふべきや否な（中略）小町も人に依てハ醜婦^{しうふ}とせらるべく楊妃も人に依てハ醜婦とせらるべし又同時に板額^{かきね}も累も人に依てハ美人とせらるゝも未だ知るべからざるなり

（引用資料の太字・傍線は筆者による）

この社説には、小野小町も楊貴妃も登場する。新聞および雑誌に記録が残る例として、クレオパトラ、楊貴妃、小野小町の名が並ぶのは、この記事が最初である。美醜の判断基準が個人の感覚や地域差により多様であることを説いた例の中に、美女の例として三人の名が登場する。クレオパトラはアフリカの人々の感覚は美人ではないかもしれないと論じる内容からは、あくまでもローマの基準で美女と見なされた人物としてエジプトの女王クレオパトラを捉えていることが分かる。後に引用する明治29年（1896）6月の『商業資料』（大阪経済社）に掲載された浦邊兼好の「美人論」でも、「羅馬のクレヂパトラ佛國のジョセヒイン」と、クレオパトラはローマの美人として取り上げられている。

上記の社説掲載の直後、同じ明治21年（1888）の10月9日から11月6日にかけて読売新聞に連載された小説「わたしでも」の第13回（10月25日）には、主人公の酒井が次のように豪語する一節がある。

今の御嬢さん方で之に及ぶものがあるか エヘー それさへ振り佛つ
た己だから^{おれ}楊貴妃クレオパトラをつれてこなくては到底だめだ

濛怪子と名乗るこの小説の作者は、山田美妙である⁵。「わたしでも」は、最初の言文一致体の新聞小説となる「武蔵野」(明治20年(1887))の翌年に連載された。「わたしでも」に、小町は登場しない。しかし、ごく初期の言文一致体小説にクレオパトラと楊貴妃の名が美人の代表例として挙げられ、新聞を通して人々に名前を知られたことは確認できる。西洋と東洋の美女の代表例として、美妙はクレオパトラと楊貴妃を選んだものと考えられる。

いち早くクレオパトラの名を小説に取り入れたのは美妙であったが、クレオパトラの名が作中で繰り返し登場するのは、ヒロインの藤尾がクレオパトラになぞらえられた夏目漱石の「虞美人草」(明治40年(1907))である。

ただし小説の題名の通り、漱石がクレオパトラの引き合いに出したのは、楊貴妃や小野小町ではなく虞美人であった。物語終盤で自死に至った藤尾の枕元に立てられた逆屏風は、銀地に赤と紫の虞美人草を描くものである。毒をおおぐ藤尾の死はクレオパトラの服毒死がふまえられたものであるが、その追悼のあり方は、垓下に死を選んだ虞美人の姿を重ねたものとなっている。虞美人のように墓に花が咲くのではなく遺体が花(の絵)に囲まれる様子は、ラファエル前派の画家ジョン・エヴァレット・ミレイ(John Everett

5 『読売新聞』明治21年(1889)2月1日の投書「鵬外漁史と三木竹二兩位」に「美妙斎主人」「濛怪子」とあることから、小説「わたしでも」の作者が美妙であったと確認できる。

Millais, 1829-1896) が描いたオフィーリアの姿にむしろ近いものであると指摘することもできる。

明治21年(1888)に読売新聞に「流行論」が発表されたときにはクレオパトラ・楊貴妃・小野小町の他にウエナス(ヴィーナス)の名が挙げられ、美妙の小説「わたしでも」では小野小町の名は挙げられなかったように、クレオパトラ・楊貴妃・小野小町の三人が並び称される形は、当初は固定されたものではなかった。19世紀後半から20世紀前半にかけての新聞・雑誌を見渡しても、三人のほかにもナポレオンの皇后ジョゼフィーヌ、褒姒、西施、虞美人、王昭君、衣通姫、静御前、勾当内侍、淀君といった多様な人物の名を見ることができる。井上章一編『近代日本のセクシュアリティ23 アンソロジー「美人論」の変遷』(ゆまに書房、2007年)に引かれたものを中心に、いくつかの例をここに挙げる。

昔より美人薄命なりといふ(美人の定義は姑く措き茲には世の所謂美人を指す)なれど、われ思ふに、薄命美人に伴ふにあらず、美人好んで薄命に陥るもの多からんと。彼小野の小町が事は、實際有りしや否やを知らず、去れど老後落魄して、卒塔婆に倚りかゝり、乞食となりたる話柄をして實事たらしめば、彼が若き間其美を憑^{たの}み、老後の事を計らず、遂に薄命に陥りたりしことを知るべし。楊貴妃は如何、彼は玄宗の寵を頼み、一旦人世の榮華を極めたりしも、馬嵬^{ばかい}に縊殺^{いつさつ}せらるゝの不幸は、彼が自ら招きし所にあらずや。其他王昭君の如きも、胡に

遣らるゝの不幸に遭ひしは其美三千の後宮に冠たるべきを自ら許し、
畫工に賄賂せざりしに依る。亦有名の不幸に陥りたるもの、多くは自
ら薄命の境遇を造りたるものなるを思へば、其他の小薄命に陥りたる
ものは、枚挙に遑なからむ。

(ふみ子「美人箴」『女学雑誌』第257号、

明治24年(1891)3月21日)

吾人は美人の崇拜者にあらず、然れども吾人は少くとも美人の社會に
及ばず潜勢力の極めて巨大なる事を解す、羅馬のクレヅパトラ佛國の
ジョセヒイン等は更にも言はず、静御前や舞妓お國等が知らず幾多の
荒くれ男の膽玉を取挫ぎしぞ、彼等は實に梨花一枝春雨を帯ぶるが如
き嬌軀を以て、情を含み、眸を凝らし、衆人稠座の交際場裡に悠々と
打出で、一度び谷の戸出づる黄鳥の初音を紅唇より漏らさんか、…

(浦邊兼好「美人論」『商業資料』第3巻第6号、

明治29年(1896)6月10日)

我国にて千年以前の衣通姫小野小町は矢張り今日にても美人の標本に
立てられ支那にても西施楊貴妃は末代に其比稀なりと称せられるれば
美人の模型にはここん決して其差別なきものの如くまた東西の別は人
種に依りて分るること事実上決して誣るべからざれば今茲に米国婦人
社會の風潮を叙べて二十世紀の美人は今日迄の美人と自ら其模型を異

にするを説かんとする

（「20世紀の美人 米国婦人社会の新潮流」

『読売新聞』明治33年（1900）2月24日朝刊）

ナイルの河畔月影落ちて、秋荒寥の涼風、雨を呼ぶ^{あた}邊り、永久に空を
摩するピラミットを仰ぎましたならば、誰か國色絶倫なりしクレオパ
トラの美を偲ばざらんや、項羽が^{そそ}濺ぎし虞氏の涙、勾當の内侍に離別
を惜しみし新田氏、一國の運命を累卵の危ふきにより救つた健気な少
女もあれば、政變の犠牲となつて、自ら潔く断頭臺上の露と消えて、
時の志士を^{はげ}激ました美人も佛國にはあつた。

（泊子「美人の勢力範囲」『女学世界』第6巻第8号、

明治39年（1906）6月1日）

クレオパトラ、楊貴妃、小野小町の三人に絞り名が挙げられた早い例は、
自然主義文学の代表的作家として知られる徳田秋聲が読売新聞に大正4年
（1915）に発表した随筆である。

動物でも樹木でも草花でも、異常なものに出会ふたときの感じは可
也尊いものである。いつかの家庭博覧会で見た多くの優れた金魚な
どは、人間で言へば楊貴妃とか小町とかクレオパトラとかいふやう
な優越な品種で、それを描いてある浮世絵などに現はれた当時の人

達の豪華な生活などが適切に想像された。翠帳紅閨のうちに、多くの奴婢をつかつて、錦繡綾羅に裹^{くる}まつてゐる美人のやうに、ゆつたりと慵^{ものう}げな風をして、鰭や尾を動かしてゐるさまは、魚族の女王と云ふ形である。

（徳田秋聲「一日一信」『読売新聞』大正4年（1915）9月28日朝刊）

秋聲は、当時の金魚の品種に楊貴妃、小町、クレオパトラらの名が用いられていたことを記している。この随筆が発表される頃までに、世界を代表する美女として楊貴妃、小町、クレオパトラを挙げることが珍しくはなくなっていたことが推測される。西洋の文化が伝わってきたことによりクレオパトラの名が知られ、世界の美女を比較する美人論が特に明治中期以降に新聞や雑誌で展開されてきた中で、どうやら大正初期までに「世界三大美人」が絞られていったようだ。

「虞美人草」は朝日新聞の連載であり、美人論はさまざまな雑誌や新聞で展開されているが、中でも読売新聞に掲載が目立つ傾向がある。大衆に人気を博す記事が多く取り上げられる傾向のあった読売新聞が、「世界三大美人」を生み出す主な素地の一つであったと指摘することができるだろう。新しく伝わってきたクレオパトラの知名度も、新聞が加速させたと考えられる。小説、随筆、社説とさまざまな記事の中で、クレオパトラは取り上げられていった。

「世界三大美人」は日本の独自の言説であると言われるようだが、「三

大」を選ぶことを好む素地は、日本に早くからあった。たとえば道綱母について、『尊卑分脈』に「本朝第一美人三人内也」とあることが知られている。森睦彦編『名数数詞辞典』（東京堂出版、1980年）は「三美婦」の項目に衣通姫、光明皇后、道綱母の名を挙げるが、『尊卑分脈』には道綱母以外の二名が誰かについての記述はない。

江戸期には、鈴木春信が描いた明和三美人（笠森お仙、柳屋お藤、蔦屋およし）、喜多川歌麿が描いた明和三美人（富本豊雛、難波屋おきた、高島おひさ）のように、三人の美人を並べて描く浮世絵が登場している。肉筆浮世絵でも三幅対の美人画が複数作られているが、特に浮世絵版画を通して、美人の肖像はプロマイドのように広まっていた。

クレオパトラ、楊貴妃、小野小町が世界三大美人としてもてはやされるようになった大正期には、九条武子、柳原白蓮、そして江木欣々もしくは林きむ子が大正三美人と称されていた。世界の三大美人を論ずる動きと、日本の三大美人を新たに大正期に選出した動きは、平行するものであっただろう。大正3年（1914）に上野公園等で開催された東京大正博覧会でも、三美人の選抜が行われている⁶。雑誌記事索引集成データベース「ざっさくプラス」で検索すると、「世界三大宗教」や「世界三大都市」といった用語もまた、明治20年代頃から雑誌に多く登場してきていることが確認できる。世界の三大〇〇を選ぼうとする風潮が高まり、それが美人について確立してきたのが、大正初期の頃であったとみられる。

6 「大正博の選抜美人——大正博三美人 陸軍中尉夫人 奥秋かなり」『トヤマ』第122号（トヤマ新聞社、1914年3月）参照。

2 西洋のオリエンタルな 美女としてのクレオパトラ

明治40年（1907）に発表された「虞美人草」の中で、小野は藤尾に、クレオパトラは「紫の女」であるとの印象を語り、「沙翁が描いた所を私が評したのです。」と述べている⁷。『アントニーとクレオパトラ』第二幕第二場にも、またシェイクスピアが参照したプルターク『英雄伝』にも、紫の絹の帆を張った船でクレオパトラがカエサルに会いに行く場面がある。地中海産のアッキガイ科の貝の分泌液から産出された紫は、1つの貝から少量しかとれず非常に高価であったため、ローマ時代には皇帝と元老院議員のみの衣服に使用され、「帝王紫」と称された色であった。

7 『虞美人草』（二）、『定本漱石全集』第四巻、岩波書店、2017年、p. 28。



図版1 島村抱月改作『クレオパトラ シェイクスピア作』(新潮社、1914年)口絵
(国立国会図書館デジタルコレクションより転載)
原画は John Maler Collier《The Death of Cleopatra》(1910年、Oldham Art Gallery 蔵)



図版2 坪内逍遙訳『沙翁傑作集 第8編 アントニーとクレオパトラ』（早稲田大学出版部、1922年）口絵（国会図書館デジタルコレクションより転載）



図版3 Lawrence Alma-Tadema 《The Meeting of Antony and Cleopatra》1885, 65.4 × 91.4 cm, Oil on canvas, Private Collection（Wikimedia Commons より転載）

逍遙訳『沙翁傑作集 第8編 アントニーとクレオパトラ』(早稲田大学出版部、1922年)には、口絵としてローレンス・アルマ＝タデマ (Lawrence Alma-Tadema, 1836-1912) の《The Meeting of Antony and Cleopatra》(1883年、個人蔵) が掲載され、島村抱月改作『クレオパトラ シェイクスピア作』(新潮社、1914年) の口絵にはジョン・メイラー・コリア (John Maler Collier, 1850-1934) の《The Death of Cleopatra》(1910年、Oldham Art Gallery蔵) が掲載されている (図版1)。アルマ＝タデマは古代ローマ、ギリシャ、エジプトなどの歴史をテーマにした作品を数多く残した画家であり、コリアは肖像画を多く手掛けたラファエル前派の画家である。明治・大正期の人々が接したクレオパトラのイメージは、多分にヴィクトリア朝の絵画に依拠したものであった。

逍遙訳に掲載されたのはモノクロの図版であったが、アルマ＝タデマの絵では、天蓋に紫がかった薔薇の飾られたクレオパトラの船が描かれていた (図版2・図版3)。また、神話や物語に登場する女性を多く描いたヴィクトリア朝の画家ジョン・ウィリアム・ウォーターハウス (John William Waterhouse, 1849-1917) の作品にも《Cleopatra》(1888年、個人蔵) がある。クレオパトラは強いまなざしを持つ女性として描かれ、黄金の玉座には紫色の豹柄のクッションが据えられている (図版4)。「夏目漱石の美術世界」展 (東京藝術大学美術館、2013年) では「虞美人草」と絵画との関係は取り上げられていなかったが、漱石が『アントニーとシェイクスピア』『英雄伝』以外に絵画も着想源として、強い女性、「紫の女」としてのクレオパトラ像



図版 4 John William Waterhouse 《Cleopatra》
1888, 64.3 × 56.9 cm, Oil on canvas, Private Collection
(Wikimedia Commons より転載)

を構築したことを考えてもよいであろう。

加えて、フランスの作家テオフィル・ゴーティエ (Théophile Gautier, 1811-1872) による幻想的な短編「クレオパトラの一夜」(“Une nuit de Cléopâtre”, 1838年) をラフカディオ・ハーン (Patrick Lafcadio Hearn, 1850-1904) が1882年に英語に訳しており、この英訳を漱石が読んでいたことが推測されている⁸。「クレオパトラの一夜」において、クレオパトラは紫色の衣をまとっている⁹。「虞美人草」の小野がクレオパトラを「紫の女」と評するまでに紫のイメージが強められた背景には、ゴーティエの「クレオパトラの一夜」を含め、漱石が生きた世紀末の絵画や小説からの影響もあったと考えてもよいであろう。

漱石に限らず、明治・大正期の日本人が知りえたクレオパトラ像は、多分に世紀末のヨーロッパの文芸における「^{ファム・ファタル}運命の女」の相を呈したものであった。紀元前後に遡るクレオパトラの肖像は巻き毛のものと直毛のものとが混在しており、18世紀頃までは金髪にも黒髪にも描かれてきたが、東洋趣味

8 平石典子「『外国語(文学)』を読む女たち——可憐な生徒から宿命の女へ」『応用倫理——理論と実践の架橋』第10号別冊、2018年3月。

9 ハーン訳には imperial purple とあるクレオパトラの衣の色は、田辺貞之助訳(1948年)および小柳保義訳(1991年)では緋色とされた。古代ギリシャ語 $\pi \rho \phi \acute{\upsilon} \rho \alpha$ に起源を持つ purple は、10世紀末以降 rouge foncé (暗赤色) を指すと見なされた例があり、18世紀以降には、rouge vif (鮮やかな赤) とされることもあったという。緋色が scarlet の訳語として定着するのは、ナサニエル・ホーソーンの *The Scarlet Letter* (1850年) が『緋文字』(富永徳磨(富永蕃江)訳、東文館、1903年)と訳されたときよりも後のようである。アーサー・コナン・ドイルの *A Study in Scarlet* (1887年) は、『血染めの壁』『壁上の血書』『深紅の一糸』『深紅の糸』などさまざまに訳されたのち、延原謙訳の『緋色の研究』(1931年)以降、この題がほぼ定着したという。古城寺尚子「色名の翻訳と作品の変容——Les rivières pourpres の場合」(『城西国際大学大学院紀要』第22号、2019年3月)参照。

の隆盛から、クレオパトラは黒髪のエキゾチックで官能的かつ退廃的な美女として描かれる機会が増えつつあった。ゴッティエの「クレオパトラの一夜」でも黒髪であった。

西洋の美女とされながら、クレオパトラがオリエンタルな美女でもあったことが、20世紀以降特に「世界三大美人」なるものをクレオパトラ・楊貴妃・小野小町とする発想を補強したと推測される。クレオパトラは、西洋の男性を破滅させるエジプトの女王であった。オリエント世界が西洋世界を一部なりとも破滅に導くことを語る文脈であるからこそ、日清・日露戦争後の日本で特にクレオパトラが人気を博したのであろう。クレオパトラ、楊貴妃、小野小町の名を並べることは、オリエント地域が世界に冠たるものとの自負を表明するものである。

日本におけるクレオパトラのイメージは、大正3年（1914）3月にサイレント映画「アントニーとクレオパトラ」(Enrico Guazzoni監督、イタリア、1913年)が浅草公園にあった電気館で公開されたことでさらに広まった。人気の活動弁士であった染井三郎の語りは、レコード化もされている。

イタリアの映画の「アントニーとクレオパトラ」が日本で公開されてから7か月後、同じ大正3年の10月には、26日から6日間にわたり帝国劇場で島村抱月脚色・松井須磨子主演の「クレオパトラ」が上演されている。舞台衣装は『史料参考 アントニーとクレオパトラ写真帖』(電気館内写真帖出版部、1914年4月)にまとめられた映画のものに寄せて作られており、松井須磨子演じるクレオパトラは、映画と同じくオリエンタルな黒髪であった。

松井が舞台に立った1914年は、日本人がクレオパトラになれることを証明した年でもあった。

抱月は改作にあたり、ローマとエジプトの双方を往復し展開する『アントニーとクレオパトラ』の物語を「余りに見世物的活動写真的である」として、「舞台をエジプト一方に限り、事件をクレオパトラのがはから見て統一した」¹⁰。あくまでも話の流れを簡明にするための演出であったが、物語の舞台としてエジプトが前面に出る形となった。その後、1917年にハリウッドで作られたセダ・バラ（Theda Bara, 1885-1955）主演の映画「シーザーの御代」(Cleopatra) もまた電気館で紹介されている¹¹。黒いセミロングの髪と妖艶な衣装は、その後のクレオパトラ像をさらにエキゾチックで艶めかしいものにした。

西洋の美女として伝わりつつも、オリエント世界の女王であり、黒髪で比較的日本人が扮しやすかったクレオパトラは、日本人にとって身近な美女であったようだ。アントニーの敗死をうけ毒蛇に胸を噛ませて死んだとされるクレオパトラと、安史の乱を招いたとされ殺された楊貴妃と、九十九夜通い詰めた深草の少将の思いを受け入れず死に至らしめた小野小町に、男を破滅させ、自分もまた滅びの道をたどる女という共通項が見出され、「世界三大美人」が選ばれていったとも考えられる。

中国の美女もまた、褒姒、西施、虞美人、王昭君などさまざまな名が美人

10 島村抱月改作『クレオパトラ シェイクスピア作』新潮社、1914年、pp. 2-3。

11 『Denkikan News』第155号（1921年12月）参照。

論に挙げられていたところ、「世界三大美人」として特に楊貴妃が取り上げられた理由として、日本に多大な影響を与えた唐を衰退に導いた女性であったことが考えられる。「長恨歌」を通して早くから日本でもよく知られてきた楊貴妃であるが、破滅を呼ぶ運命の女として近代の視点で改めて取り上げられたことで、クレオパトラと並び称されるに至ったとみられる。強大なローマを混乱に陥れたクレオパトラと、巨大な唐を傾けた楊貴妃に注目し、その二人に小野小町を並べようとした価値観には、日清・日露戦争後の日本の発想が反映されているであろう。日本が西洋世界そして中華世界に対抗できると見なす思想が、小野小町を「世界三大美人」に持ち上げたと考えられるのである。

3 「日本を代表する美女」 となる歌人小町

クレオパトラ、楊貴妃に対抗しうる日本の美女として選ばれたのが特に小野小町であったことについては、考察の余地があるだろう。徳田秋聲の「一日一信」が発表される約半年前、大正4年（1915）3月に教育者の三輪田元道が発表した随筆には次のようにある。

西洋では、クレオパトラ、支那では、楊貴妃、褒姒、日本では、小野小町、淀君などが美人の代表者となつてをります。これらの美人の前半生は、トントン拍子で幸福に向ひましたが、その幸運が頂點に達しますと、どうも同情されないやうな行ひばかりしてをります。いかに美人でも、世間から同情を失つては、決してその幸運も續くものではありません。栄耀栄華も槿花一朝の夢と消えて、或は人に殺され、或は野に斃れて、屍を山野に曝すやうな悲惨な最期を遂げてをります。美人薄命とはこれをいつたものです。

（三輪田元道「美しい女と賢い女と」『婦人世界』第10巻第3号、

大正4年（1915）3月1日）

三輪田の文章には、褒姒や淀君の名も挙げられている。悲劇的な末路という共通点だけでは、世界三大美人をクレオパトラ、楊貴妃、小野小町の三人に限定する要素としてはやや弱い。また、国を滅ぼした美女という意味ではクレオパトラ、楊貴妃、褒姒には類似する点があり、淀君を挙げることにしても説得力はあるが、小野小町については傾国の美女という要素は必ずしも当てはまらない。「美人薄命」というには、小町の美貌は確かに若さとともに失われたかもしれないが、老いて地方をさすらい亡くなったとされる伝説を考えれば、「薄命」と表現することは正確ではないだろう。

傾国の美女とは言い難い小町をクレオパトラ、楊貴妃と並ぶ日本を代表する美女として選ぶ要素は、悲劇的な最期以外にもあったことが推測される。その要素を明らかにすることが、「世界三大美人言説」の確立の経緯を考えるうえで必要であるだろう。そこで考えたいのは、「小町」が小野小町個人を指すのみでなく、日本において広く美人を表す名称でもあった点である。

明治40年（1907）9月、『シカゴ・トリビューン』紙の企画となる世界美人コンテストが企画され、時事新報社が日本予選を開催した。この予選で、小倉市長であった末弘直方の四女であり、出身地にちなみ「小倉小町」とも呼ばれていた学習院女学部3年の末広ヒロ子（1893-1963）が1位に選ばれた。彼女の写真は明治42年（1909）1月にシカゴで開催された本選に送られ、世界で6位に入賞している。「小町」が世界でも評価される美人となった出来事であった。

昭和5年（1930）1月に郡司次郎正が小説『日本嬢^{ミス・にっぽん}』を発表し、昭和8年（1933）9月には今日のビューティー・コンサルタントの前身である「ミス・シセイドウ」の募集が始まるなど、昭和初期には「ミス」の名称が普及し始めた。ただし、美人を「小町」と呼ぶことは、昭和初期にはまだ「ミス」よりも馴染みのある表現であったようだ。井上章一氏は「小町」と「ミス」との差異を鋭く指摘する。

小町は、地域の住民が肉眼でたしかめられる範囲に、すんでいる。だが、ミスは、メディアのネットワークで拡大されたところに、存在する。両者のあいだには、メディアによる増幅効果のちがいがあ

る。美人の代名詞が、小町がミスへとうつっていくということ。それは、メディアが美人認定に介在する度合いが強まったことを、しめしている。美人の代表は、地域の小町からメディアのミスへと、かわっていったのだ。（中略）そして、そういう時代の変化もまた、昭和の初期から進行しはじめたのである。

（井上章一『美人コンテスト百年史——芸妓の時代から美少女まで』

新潮社、1992年、p. 90）

遡れば明治24年（1891）7月、浅草の凌雲閣で有名芸妓100人の写真を展示し、投票を行う「百美人」なる催しが開かれて以来、写真を用いた美人コンテストが日本でも開催されてきた。末広ヒロ子も、新聞社主催の

コンテストで、写真を通して選ばれている。浮世絵に代わり写真と新聞・雑誌というメディアを得て、各地の美女が広く知られるところとなり、日本を代表する美女を選出できる方法が確立した結果が、末広ヒロ子の評価であった。

ヒロ子の選出は「小町」が日本を代表する美女の代表的呼称であった時期のことであり、日本を代表する美女の評価は、「小町」の活躍でもあったとみなすことができる。また、小野小町を世界三大美人の一人に数える発想は、「ミス」よりも「小町」がより身近であった昭和初期までの時期にこそ現れてきたものと考えられる。

美女を「小町」と呼ぶ例は、19世紀初頭頃から『俳風柳多留拾遺』などに登場している。「〇〇小町」なる呼称は、小町伝説に取材した七つの謡曲「七小町」(草子洗小町・通小町・卒都婆小町・関寺小町・鸚鵡小町・山本小町(または雨乞小町)・清水小町)があったことから定着しやすかったと考えられ、浄瑠璃や歌舞伎を通してさらに広まったものとみられる。時代や地名と結びつき「天明小町」「小倉小町」のような呼称が生まれたのは、いわゆる見立ての趣向により、身近な時と場所に小野小町を見出す江戸期の文化に由来するものと考えられる。

小野小町本人の生涯は謎が多く、そもそも、美貌の女性であったが晩年には落魄したという伝説も、『玉造小町子盛衰書』の主人公「小町」と混同されたことによるところが大きい。『古今和歌集』に収められた小野小町の歌「みるめなきわが身をうらと知らねばや離れなで海人の足たゆくくる」(恋歌

第三・623) が、『伊勢物語』第二十五段で「色好みなる女」の歌として引かれたことが、混同を招く要因の一つであったと考えられている。

その生涯に謎が多いためか、『本朝女鑑』(寛文元年(1661)刊)や『本朝列女伝』(寛文8年(1668)刊)には小町の名は見られず、『女学世界』(明治34年(1901)創刊)の史伝、『女鑑』(明治24年(1891)創刊)の史談にも、小町は登場しなかった。その一方で、小野小町が晩年さすらったとされる秋田雄勝では、文化9年(1812)に顕彰碑が建てられ、菅江真澄の『小町のふるさと』(天明5年(1785))などで小町伝説の紹介がなされている。

小野小町の足跡を追う研究の流れは続き、明治3年(1870)にも、雄勝郡稲川町の神官であった佐藤信敏が『小野小町実記』を出版している。さらに旧秋田藩士である小松弘毅が明治27年(1894)に『小野小町貞女鑑』を上梓し、『長恨歌評釋』も著した岩井正次郎が『小野小町』(大学館、明治33年(1900))を、俳人の秋元酒汀が『小野小町』(白鳩社、明治35年(1902))を刊行するなど、明治後期には伝承の数々を集め評伝を編む動きが認められた。

小町の評伝の中でも注目すべきは、黒岩涙香による『小野小町論』である。大正元年(1912)9月から大正2年(1913)4月にかけて朝報社刊行の『淑女かゞみ』(後に『婦人評論』に改題)に連載され、大正2年に同じく朝報社より単行本化された。涙香は、百夜通いの少将も受け入れなかった小町の貞淑を評価し、小松弘毅の『小野小町貞女鑑』の論調をさらに強調する貞女論を展開した。

小町はその生涯が断片的に知られるのみであるがゆえに、評伝における断片の繋ぎ方に時代や執筆者の思想が反映されやすい人物であった。『淑女かゝみ』第4号が刊行された時期は、明治44年（1911）に『青鞥』が創刊されるなど、婦人運動の気運が高まった時期でもあり、涙香は同号に「婦人覚醒の第一歩」なる論文を寄稿している。涙香は、女性が男性に貞操を許すことは、男性に軽侮される端緒となるとするオーストリアの哲学者オート・ワイニンゲル（Otto Weininger, 1880-1903）の議論を紹介し、男性の求愛を拒み、独身を貫くことに女性の理想を見た。涙香が「発見」した歴史上の理想の女性が小野小町であり、涙香は熱のこもった文体で「小野小町論」をまとめている。

余は幸いにして、我が日本に、今より千有余年前に、日本の女子のために、活きたる手本を示した偉絶壮絶なる貞女の女神の有ることを知っている、彼の女はしかも絶世の美人であつた、全く女らしい点に於て総ての女に優絶した乙女である、彼の女は千有余年後の今の人が漸く知り得た「一夫にだも見えず」の崇高なる貞操観を千有余年前に体現して身を犠牲に供するを厭わなんだ、彼の女は全くの奇蹟である、恐らくは天が、世界の墮落し易き「貞操の何たるを知らぬ」女達に対し、迷いの夢を醒さしむるために響き渡らせた警鐘であろう、余は次に彼の女の事を述べて世に^{ただ}質さんと欲するのである、彼の女とは誰れぞ、姓は小野、名は小町、先ず彼の女の^{くちずさみ}口吟を聞け、

ともすれば仇^{あだ}なる風にさゝ波の

靡くてふごと我れ靡けとや

（黒岩涙香「小野小町論」予告 『淑女かゞみ』第4号、

大正元年（1912）8月）

涙香が日本を代表する美女として小町を選んだ背景には、主宰していた新聞「萬朝報」で明治37年（1904）2月11日に東京かるた会の発起を呼びかけ、今日の競技かるたの基盤を作った経緯があった。同じく「萬朝報」にて、明治38年（1905）1月1日には「小倉百人一首かるた早取り秘伝」を発表し、かるた大会を盛り上げようとする動きを顕著にしている。

小野小町が日本を代表する美女として明治後期から大正期に特に注目された理由として、「小町」が日本の美人の代名詞であったことに加えて、歌人であり、「国風文化」の担い手であったことも挙げられるだろう。中華世界そして欧米列強に対抗するにあたり、国内でナショナリズムが高まる中、小町は再評価されたと考えられる。涙香もまた、小町の歌才を称賛している。

小町の生涯を見通して考えますれば、小町は絶世の美人であったことも無論であります、歌の天才を備えていた事も容貌の美を備えていた程度に劣りません、小町は平安以後に多く現われた才媛の中で時代の順序に於て第一であると同じく歌の秀でたことに於て第一でありま

す、(中略) もしも理想の淑媛とは何ぞと問われる場合には、貞操の外に
容貌の美も、才芸の美も備わった女といわねばなりますまい、(中略) 私
しは小野小町を考えて、三美を一身に集めたものであると知り、或は
天が、長く日本の婦人のためにこの優れたる手本をこの世に降したの
であるまいかとまでに思います、

(黒岩涙香「小野小町論」)(15)

千古の淑媛 (現代教養文庫、pp. 161-165))

涙香は貞操、容貌、才芸の揃った小町を絶賛したが、容貌と才芸とは
相容れぬものとする美人論も多く、美人は不幸を招く存在と見る論調も
明治・大正期に認められた。井上章一『美人論』(リプロポート、1991年(の
ちに朝日文芸文庫、1996年)) には、次のような評論が掲載されている。

されど天下美人亦多からむ。美人の諸嬢子よ。美人の不幸は美人自ら
招く所なれば諸嬢子にしてにして美を誇る心なく愚夫のふるまひを取
りあふなく年たくるまで醜婦の心を以つて凡べてを行はば美人たりと
いへどもまた何の不幸かあらむ。

(松下曲水『恋と人』 広文堂、

明治34年 (1901)「美人は幸福なるか (女子に)」

美人は気驕り心緩みて、却つて、人間高尚の徳を失ふに至るものなき

にあらず、慢気は美を損なふ。慎むべし、之れに反し、醜女には、従順謙遜勤勉等種種の才徳生じ易き傾あり。

(加藤弘之・中島徳蔵『明治女大学』大日本図書、
明治39年(1906)巻の三 第三章第六節・容貌)

女学校に於いて『卒業面』といふ言葉の流行した事があります。何ういふ訳かと言ひますと、美人相の女は大抵卒業前に嫁に貰はれて、卒業して了ふ女は先づ醜婦に限られたやうな有様だつたので、醜い顔の事を卒業面と言つたものでした。

(三輪田元道「容貌の美と誘惑の手」『女学世界』
第16巻第6号、大正5年(1916)5月10日

知的素養を積んだ人の容貌には、その道具は整つてゐなくても、その姿の何処かに自然に人を引きつける一種の力を持つてゐるものであります(中略)容姿の美についていへば、知的要素のあるものが最も貴ばれるべきであります。

(宮田修「形の美よりも心の美」『婦人世界』第15巻第4号、
大正9年(1920)4月)

これらは、いずれも教育者による文章である。松下曲水(大三郎)は「松下文法」の提唱で知られる文法学者で國學院大學教授であり、加藤弘之は帝

国大学元総長、東京帝国大学哲学科出身の中島徳蔵は東洋大学などで教鞭をとっている。先にも名を挙げた三輪田元道は三輪田女学校長の開祖の養嗣子にして教員であり、宮田修は成女高等女学校校長である。女性の美貌と学業とがいかに両立しうるか、「才色兼備」のあり方が取り沙汰される中で、宮田のような論もあるが、美は不幸を呼び、醜女に才徳が宿る傾向があることが議論されている。

「世界三大美人」とされたクレオパトラ、楊貴妃、そして小野小町は、いずれも悲劇的と言える最期を迎えている。自死するクレオパトラ、殺害される楊貴妃、落魄する小町と、それぞれの末路は異なるため、その最期に悲劇性という以上の共通点を見出すことは難しい。しかし先述のように、クレオパトラと楊貴妃には国を傾けた美女という共通点があり、小野小町に傾国の美女たる要素こそないが、日本が清そしてロシアを倒したことで、「小町」にも大国を滅ぼした美女の役割が付されたと見ることができる。

傾国の美女たちは「敵国」を倒す力を有していたが、涙香が小町を絶賛したように皆が手放しでその美貌や「功績」を褒めたたえたかという、男性を破滅させる女性への恐怖からか、悲劇的な最期を迎えたからこそ美女たちは評価されている感がある。国を滅ぼした女性もまた滅びることで男性の自尊心を損ねず、日本の美女たる小町も、晩年に美貌を失い落魄したことで、男性を受け入れなかったことの「罰」を受けたと見なされたことが推測される。「世界三大美人」が悲劇的な美女揃いであるのは、主に男性により選ばれた三人であったことの影響が大きいであろう。

現代では、「世界三大美人」には小野小町ではなくヘレネを数えるべきだとする見方もある。これは日本人が「世界三大」に名を連ねることを憚った結果であるだろう。代わりに登場するのが西洋の伝説的な美女であるところに、おそらく太平洋戦争後のものと思われる西欧への劣等感を読み取ることができる。クレオパトラとヘレネという、ヨーロッパ世界で美女とされた人物が三人中二名を占めるところにも、西洋中心主義が認められる。

一方で、小野小町が引き続き「世界三大美人」に数えられることもあるのは、日本の自負でもあるように思われる。西洋や中国に対抗する力が日本にあると信じたいとする願望が、現代も小野小町を「世界三大美人」の一人としていると考えられるのである。

おわりに

西洋の人名が日本で知られたことで、東西の美女を論じる美人論が展開され、その中でクレオパトラ、楊貴妃、小野小町の三人が特に注目されてゆく過程を追った。「世界三大美人」は、特定の個人があるとき提唱し始めたものというよりも、日清・日露戦争後の明治後期から大正初期の頃に、メディアを通して噂のように広まっていった言説であったと考えられる。世界各地から選抜されたように見えて、実際には破滅を導く黒髪の美女たちを選ぶ発想には、オリエンタリズムと日本のナショナリズムが反映されている。19世紀末から20世紀初頭における日本の国際的な立ち位置が小町を世界的な美女へと押し上げ、「世界三大美人」の言説を生み出したと言いうことができるだろう。

関連事項略年表

明治21年(1888)7月	『読売新聞』社説「流行論その4 美醜判断の困難」にクレオパトラの名が登場
明治21年(1888)10月	『読売新聞』連載小説「わたしでも」(濛怪子(山田美妙)作)第13回に楊貴妃とクレオパトラの名が登場
明治27年7月-明治28年4月 (1894-1895)	日清戦争
明治37年2月-明治38年9月 (1904-1905)	日露戦争
明治40年(1907)6月-10月	夏目漱石「虞美人草」『朝日新聞』に連載
明治40年(1907)9月	時事新報社、世界美人コンテスト日本予選を開催
明治42年(1909)1月	『シカゴ・トリビューン』紙、世界美人コンテストを開催、日本代表となった「小倉小町」こと末広ヒロ子、6位入賞
大正元年9月-大正2年4月 (1912-1913)	黒岩涙香「小野小町論」連載(朝報社『淑女かゞみ』(後に『婦人評論』に改題)、大正2年7月単行本化)

大正3年(1914)3月	浅草公園の電気館にてサイレント映画「アントニーとクレオパトラ」(Enrico Guazzoni 監督、イタリア、1913年) 公開
大正3年9月-大正4年6月 (1914-1916)	高橋五郎訳『プルターク英雄伝』(全4巻) 出版
大正3年(1914)10月	帝国劇場にて島村抱月脚色・松井須磨子主演「クレオパトラ」上演
大正4年(1915)6月	坪内逍遙訳『アントニーとクレオパトラ』 出版
大正4年(1915)9月	徳田秋聲「一日一信」(『読売新聞』) に楊貴妃・小町・クレオパトラの三人の名が記される
大正6年(1917)	電気館にてセダ・バラ (Theda Bara) 主演のハリウッド映画「シーザーの御代」(Cleopatra) 公開
昭和5年(1930)1月	郡司次郎正『日本嬢 ^{ミス・にっぽん} 』を発表
昭和8年(1933)9月	「ミス・シセイドウ」(今日のビューティー・コンサルタントの前身) 募集開始

日本近代における美人論に登場する主な女性たち

「世界三大美人」

- ・クレオパトラ7世（Cleopatra VII：前69年–前30年）

古代エジプトプトレマイオス朝最後の女王。カエサル（Gaius Iulius Caesar：前100–前44）の後ろ盾を失った後マルクス・アントニウス（Marcus Antonius：前83–前30）と結ぶも、オクタヴィアヌス（Gaius Julius Caesar Octavianus：前63–前14）派のローマ軍とのアクティウムの海戦（前31）に敗れ、翌年自殺した。

- ・楊貴妃（719–756）

唐代第9代皇帝玄宗（685–762）の妃。玄宗の寵愛を受け、一族は権勢を誇った。国政の乱れを招いたとされ、安史の乱（755–763）による長安からの逃亡の途中、一族で宰相であった楊国忠（？–756）とともに殺された。

- ・小野小町（生没年不詳、9世紀頃）

六歌仙、三十六歌仙に数えられる平安女流歌人。その出自や生涯には不明な点が多いが、情熱的な恋の歌から色好みの女として伝説化され、晩年には容色を失い流浪したとの話が秋田をはじめ各地に伝わる。

- ・ヘレネ（Helene）

ギリシャ神話に登場する美女。スパルタ王メネラオスの妃であったが、トロイアの王子パリスに誘拐され、トロイア戦争の原因となった。

西洋の美女

- ・ ジョゼフィーヌ・ド・ボアルネ (Joséphine de Beauharnais : 1763-1814)

ナポレオン 1 世の最初の妻。1796年に結婚、1804年に皇后として戴冠するも、1810年に離縁された。

中国の美女

- ・ 褒姒 (生没年不詳)

西周の幽王 (在位前782年-前771年) の妃。幽王は申后と太子宜臼を廃し、寵愛する褒姒の子である伯服を太子に据え、褒姒を笑わせるため、平時に烽火をあげ諸侯を集めることを繰り返したとされる。

- ・ 西施 (生没年不詳)

越王勾践 (在位前496-前467) から呉王夫差 (在位前496年-前473年) のもとに送られた女性の一人。夫差は西施を寵愛し国を傾け、勾践の復讐が果たされた。

- ・ 虞美人 (?-前202)

楚王項羽 (前232-前202) の寵姫。垓下の戦いにて漢の劉邦 (前247-前195) に囲まれ敗戦を予感した項羽は虞美人と別離の詩を詠んだという。彼女が自決したときの血から虞美人草が生じたとの伝説も存在する。

- ・王昭君（生没年不詳）

前漢の元帝（前74-前33）の宮女。前33年、匈奴との親和政策のために呼韓邪単于に嫁した。

日本の美女

- ・衣通姫

『古事記』『日本書紀』に名の記された美女で、允恭天皇の妃。艶色が衣を通し照り輝いたためこの名で呼ばれ、和歌に優れていたとされる。

- ・光明皇后（701-760）

藤原不比等（659-720）と橘三千代（?-733）との間に生まれ、聖武天皇（701-756）の皇后となり孝謙天皇（718-770）の母となった。

- ・藤原道綱母（?-995）

平安時代中期の歌人で、『蜻蛉日記』の作者として知られる。藤原兼家（929-996）との間に道綱（955-1020）を儲けた。

- ・静御前（生没年不詳）

源義経（1159-1189）の妾であった白拍子。『吾妻鏡』によれば、義経の都落ちに従ったが吉野で捕らえられ、鎌倉に送られた。頼朝夫妻の求めにより鶴岡八幡宮にて歌舞を演じ、鎌倉で出産した義経の男児は殺されたという。

- ・ 勾当内侍（生没年不詳）

後醍醐天皇（1288-1339）に仕えた女官。勅許を得て新田義貞（1301-38）の妻となった。『太平記』には、義貞の進退を誤らせた美女であったと記される。

- ・ 淀君（1567-1615）

浅井長政（1545-1573）と小谷の方（1547-1583）の娘で、豊臣秀吉（1536-1598）の側室となる。大坂夏の陣で敗れ息子の秀頼（1593-1615）とともに自刃。

著者紹介

■ 永井久美子（ながい・くみこ）

東京大学大学院総合文化研究科准教授。専門は比較文学比較文化、日本古典文学、平安時代を中心とする絵巻物。論文に「『源氏物語』幻巻の四季と浦島伝説——亀比売としての紫の上」(島尾新・宇野瑞木・亀田和子編『アジア遊学246 和漢のコードと自然表象——16、7世紀の日本を中心に』勉誠出版、2020年3月、pp. 115-123)、「紫式部の近代表象——古典文学の受容と作者像の流布に関する一考察」(『鹿島美術財団年報』第33号別冊、2016年11月、pp. 412-423)、「暴露の愉悅と誤認の恐怖——「病草紙」における病者との距離」(牛村圭編『文明と身体』臨川書店、2018年、pp. 9-37) などがある。

【編集後記】

東京大学ヒューマニティーズセンター（HMC）より、Humanities Center Booklet, Vol. 6をお届けします。

本号は、2018年10月12日に行われた第2回HMCオープンセミナー「近代「美人」言説における小野小町」での報告と議論をもとに執筆された研究成果です。

セミナー開催に当たってディスカッサントとしてご参加くださった林香里氏（東京大学情報学環・教授）に厚く御礼申し上げます。

HMC事務局（川村朋貴）

Humanities Center Booklet Vol. 6

「世界三大美人」言説の生成 ——オリエンタルな美女たちへの願望

永井久美子

2020年12月24日発行

編集発行者 東京大学連携研究機構ヒューマニティーズセンター
東京都文京区本郷7-3-1 東京大学附属図書館4階

ISSN 2434-9852

印刷者 株式会社サンワ

フォーマットデザイン 株式会社編集家族

©東京大学連携研究機構ヒューマニティーズセンター

発刊の辞

このブックレットは、東京大学ヒューマニティーズセンターにおける研究と対話の活動を多くの人々と共有するためのシリーズとして刊行されます。

ヒューマニティーズセンター（Humanities Center : HMC）は、東京大学における新たな国際人文研究の場として、大学院法学政治学研究科、大学院人文社会系研究科、大学院総合文化研究科、大学院教育学研究科、大学院情報学環、東洋文化研究所、史料編纂所、附属図書館の8部局によって、2017年7月1日に設立された連携研究機構です。そしてその中核となる部門として、株式会社LIXILグループおよび潮田洋一郎氏の財政支援により、LIXIL 潮田東アジア人文研究拠点（LIXIL Ushioda East Asian Humanities Initiative : LUI）が設置され、1年間の準備期間を経て、2018年7月から本格的に活動を開始しました。そのスペースは本郷キャンパスの総合図書館内に置かれています。

LUIの活動は、運営委員会の企画による「企画研究」と連携部局教員から公募した「公募研究」からなります。どちらの活動も、研究そのものの充実はもちろんのこと、定期的なセミナーやシンポジウムによって、研究の経過や成果を学内外の方々と共有することに努めてきました。それぞれの連携部局では、すぐれた研究は個々に日々行われています。けれども、それを相互につなぐ場、学内外に開く場については、なお工夫の余地がある。このセンターでは、定期的に広場で開かれる親密な雰囲気のような学術の場を作りたい。巨大プロジェクトや著名な研究者の招聘にもまして、そうした場の存在こそがヒューマニティーズには必要だ。私たちはそう考えました。

そしてこのブックレットもまた、これらの研究と対話の活動を共有する場の一つとして構想されました。印刷されたものであれ、デジタルによるものであれ、冊子には冊子の利点があります。シンポジウムやセミナーの記録として、新たな知見の発信媒体として、ブックレットが確かな役割を果たすことを願っています。

2019年7月

ヒューマニティーズセンター 機構長 齋藤 希史

INDEX

はじめに

1 クレオパトラの登場と美人論の展開

2 西洋のオリエンタルな美女としてのクレオパトラ

3 「日本を代表する美女」となる歌人小町

おわりに

関連事項略年表

日本近代における美人論に登場する主な女性たち

著者紹介

編集後記

